

独自の活動でアジア太平洋の発展に貢献するAPIR

日本とアジア太平洋地域の持続的発展に寄与すべく研究活動を行うアジア太平洋研究所(APIR)。唯一無二のシンクタンクとなるべく、2011年12月の発足からAPIRを牽引する宮原秀夫所長に、これまでの活動の振り返りと今後にかかる思いを語ってもらった。

APIRがめざす研究所像は。

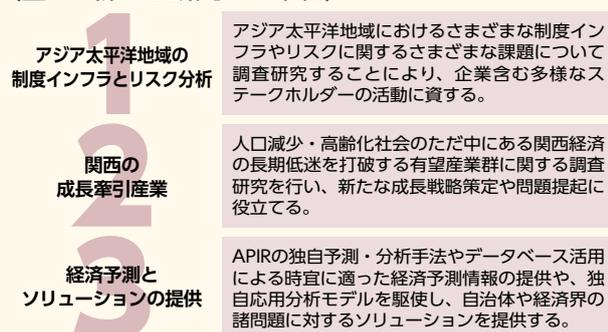
APIRは、これからのアジア太平洋地域の持続的な発展をサポートすることを目的に創設されました。特定の企業や政府の影響を受けない中立的な立場にあり、大学ではできない実践的な研究を行うことが、ほかのシンクタンクと大きく異なる特長だと考えています。

APIRは関西を中心とした約180社の会員企業・団体に支えられている研究所です。今後、さらに経済界のニーズをくみ取り、独自の分析や研究を発展させて、会員や自治体等から評価される活動を通じ、プレゼンスを向上させることが重要であると考えています。企業や自治体からは「関西経済やアジア太平洋のことはAPIRに聞こう」「APIRに研究を委託したい」と頼られ、研究者からは「APIRでぜひ研究したい」と言われるような、信頼される研究所をめざしていきます。

これまでの活動を振り返ると。

さまざまなところから講演や取材の依頼をいただいたり、研究成果が新聞等で取り上げられたり、また在阪領事館を通じて海外からの訪問希望が増えたりするなど、APIRのプレゼンスが着実に向上しているという手応えを感じています。

〈図1 新たな研究の3本柱〉



宮原 秀夫 アジア太平洋研究所(APIR) 所長

APIRでは「研究」の概念を広義に捉え、人材育成や成果の発信までを含めて「研究」と考えています。例えば、昨年度開催した「うめきた研究会」では、うめきた2期区域開発について、さまざまな立場の方から意見をお聞きし、まちづくりのあり方について検討しました。うめきた2期区域開発は、公益的かつ価値あるものでなくてはなりません。意見が異なる者同士でも自由に議論できる場を設け、うめきたに位置する研究所として、一定の存在感を示したいと思います。

APIRは、2年前に多様な知的人材・情報の交流拠点である、うめきたのナレッジキャピタルに移転しましたが、研究者同士の交流や他の研究機関との連携が促され、発信力が強化されるなど、プレゼンス向上において大きな意義があったと考えています。

今年度の研究計画策定のポイントは。

研究を行うにあたり、テーマ選定は生命線ともいえる

重要な問題です。「日本とアジア太平洋地域の持続的発展に寄与する」という研究所のめざすべき姿をふまえ、時宜にかなったテーマを選定することで、さらなるプレゼンス向上をめざしたいと考えています。今年度の研究テーマ選定にあたっては、経済界のニーズを把握するため、関経連をはじめとする経済団体にヒアリングを行い、新たな研究の3本柱を策定しました(図1)。その上で、内部研究員がリーダーとなって研究に取り組むとともに、ニーズに合わせて期中でも機動的に対応できるような研究推進体制を整えました。また、関西財界セミナーでの議論もふまえ、関経連と共同で、東京一極集中の是正と地方大学のあり方に関する調査研究も行います。

APIRの規模を考えると選択と集中が必要ですが、どこにターゲットを置くかという絞り込みを行うことは、なかなか容易なことではありません。私は、日本が抱える課題の解決につながるような、社会的に関心が高いテーマを選定することこそが重要だと考えています。その研究成果は必ずしも個々の企業の期待する結果ばかりではないかもしれませんが、「中立」な研究所としてセンシティブな課題にも切り込んでいくことこそが、APIRの役割と考えています。

今後、注力することは。

「日本には資源がない」とよくいわれますが、「人材」という素晴らしい資源があります。人々が、モノを消費する活動よりも、文化・教育に対する消費に一層ウエイトを置くようになれば、豊かな人材が育つでしょう。経済発展には、豊かな人材の育成が不可欠です。

APIRにおいても、関西の活性化のためのグローバル人材育成方策について研究していますが、同時に、所内の人材育成も積極的に行っています。具体的には、留学生インターンや企業からの出向者も含め、主体的に研究活動を進めてもらうことが大切と考えています。外部の大学の先生方に任せるだけでなく、出向者には、時として自らがリーダーとなって研究活動に取り組むことで経済・産業分析、政策立案活動の知見を高め、APIRでの経験を後のキャリアパスに生かしていただきたいと思っています。このことは、出向者を出していただいている企業に対するわれわれの責任だと考えています。APIRで培ったことを出向元でも生かしていただき、それが企業の成長につながればと思っています。このような考え方のもと、今年度も、引き続き人材育成に注力していきます。

(聞き手：企画広報部 矢尾板歩美)

〈図2 APIRの発展に向けたサイクル〉

